Ⅵ.　看護研究Ⅱ　　執筆要領

1．表紙書式

・A4 版白色無地の用紙を使用し、縦置き横書き、余白は上下 30mm 左右 25mm 程度
・書き始めから 7 行空けて 8 行目に科目名を入れる（MS 明朝、文字サイズ 20、中央揃え）
・その下 9 行目に論文タイトルを入れる（MS 明朝、文字サイズ 20、中央揃え）
　※1 行におさまらない場合は単語の区切りのよいところで改行する。
・サブタイトルがある場合はタイトルの下に入れる（MS 明朝、文字サイズ 18、中央揃え）
　※前後に　―（全角ダッシュ）を入れる。
・7～15 行程度空けて、研究期間、研究の種類、学籍番号、学生氏名、研究指導教員を入れる。
　（MS 明朝、文字サイズ 12、右揃え）
・研究指導教員の下に 7 行程度のスペースができるよう調整する。

2．本文書式

・A4 版白色無地の用紙を使用し、縦置き横書き、余白は上下 30mm 左右 25mm 程度、1 枚の文字数は 1600～1800 字程度（40 字×40～45 行）とし、A4 版用紙 5 枚（8000 字）以上で上限なしとする。
　※目次は不要である。引用文献、参考文献、図表参考資料は規定外（最後）に添付する。
・本文 1 ページ目の最上段には論文タイトルを入れる（MS 明朝、文字サイズ 12、中央揃え）。
・論文タイトルのすぐ下段に学籍番号および学生氏名（複数の場合は 2 段に分けて全員記載）を右揃えで入れ、その下から本文を開始する（MS 明朝、文字サイズ 10.5、左揃え）。
・本文中の英数字は原則半角とし、1 桁の数字や 1 文字のみの欧文（英字）は全角文字とする。
（例：CiNii　WHO　1974 年　A 氏　Z 施設　C 群　1 番）
・量記号（サンプル数の n や確立の p などの数値すなわち量を表す記号）に対しては、欧文書体のイタリック体（斜体）を使用する（例：$p<.05$　t 値　M　SD　）。
・整数部分が 0 で理論的に 1 を超えることのない数値は、小数点以下だけを表現する。
（例：$p=.001$　$r=.315$ ）
・句読点は、全角とし「、」「。」で統一する。
・本文の下部（フッター）中央にページ数を入れる。

3. 見出し

・論文の構成をわかりやすく提示するために見出しを階層化する。見出しの階層は第 1 階層から第 4 階層までとする。
・第 1 階層は論文タイトルで、見出しに数字やアルファベットを付けない。
・第 2 階層は、Ⅰ．Ⅱ．Ⅲ．（全角ピリオド）とし、第 3 階層は、1．2．3．（全角ピリオド）、第 4 階層は　1）2）3）、以下（1）（2）（3）→　①　②　③　の順に使用する。第 3 階層以下は、上位の見出しより 1 字下げる（MS 明朝、文字サイズ 11、左揃え）。
　※見出しの後に続けて本文を書かない。
　※「はじめに」、「倫理的配慮」、「用語の定義」、「おわりに」や「結語」、「謝辞」を使用する場合は第 2 階層ではあるが、本文中では見出し数字や記号は使用しない。

4．図表の作成

・図表にはタイトルをつけ、図は下部（中央揃え）に、表は上部（左揃え）に「図 1」、「表 1」のように通し番号を振り、その後に全角スペース分空けてからタイトル名を示す。

・図表は、原稿本文とは別に巻末に添える。白黒表示とするが必要な場合カラーでもよい（写真も可）。

・表の罫線は必要な横罫線だけにとどめ、縦罫線は使用しない。縦罫線のかわりに十分な空白を置く。

【例】

表 1　対象者の基本属性

n =393

項目		*n*　(%)	
性別			
	女性	373 (94.9)	
	男性	20 (5.1)	
			平均 (*SD*)
年齢			21.5 (0.5)
臨床経験年数			11.1 (0.2)

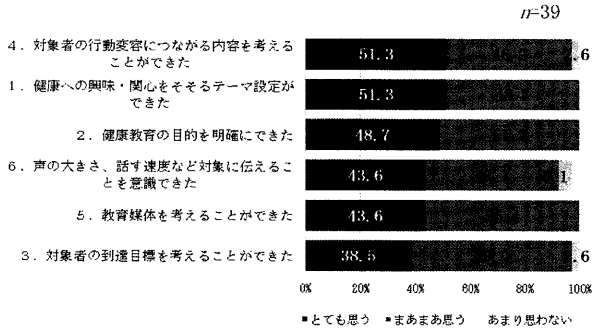

図 1　健康教室の自己評価

5．引用参考文献の記載方法

・本文中の引用箇所には「(著者の姓、西暦文献発行年、引用ページ)」を付けて表示する。

・引用が複数頁にまたがる場合は「pp. xxx－xxx」とする。

※直接引用の場合は引用部分を「　」で示し、ページ数も記載する。

【例】佐藤（2014）は「・・・原文・・・」(p.44) と述べている。

「・・・原文・・・」と佐藤は述べている（2014, pp.44－45)。

佐藤は、・・・は・・・である、と主張している（2014, p.44)。

※内容を要約して引用する場合は著者の姓と発行年のみでよい。

【例】先行研究では、「・・・要約・・・」と考えられている（佐藤・鈴木　2004)。

※2～3 名の著者による単独の文献の場合は、その文献が本文に出現するたびに常に両方の著者の姓の間に「・」を付して表記する。外国語文献では、著者姓を「&」でつなぐ。初出以降に再引用する場合も同様である。

【例】鈴木・佐藤（2013）によると「・・・は・・・である」(p.3)。

「・・・は・・・である」と佐藤・鈴木・田中は述べている（2011, pp.120–123)。

鈴木・佐藤は、・・・は・・・である、と主張している（2013, p.3)

Suzuki & Sato（2013, p.3）は、・・・。

※著者が 4 名以上の場合、文献が初出の時点で 3 名までの著者姓を「・」でつないで記載し、4 人目以下 は「他」と表記する。外国語文献の場合では、最後の著者姓の前に「&」を入れる。

初出以降に再引用する場合は、最初の著者の後ろに「他」を付ける。外国語文献の場合は、「et al.」

【例】・・・であることが明らかにされている（鈴木・高橋・佐藤・田中，2011)。

（鈴木他, 2011)。

・・・であることが明らかにされている (Johnson, Williams, Brown, Jones, & Smith, 2011)。

(Johnson, et al. 2011)。

※著者が 6 名以上の場合は、初出・再引用にかかわらず、筆頭著者の姓のみに「他」（欧文の場合は

「et al.」を付す。

※同じ主張を複数の人がしている場合は、発行年の早い順に；でつないで併記する。

【例】「・・・要約・・・」だと見なされることが多い（佐藤・鈴木　2004；田中　2012）。

・書籍の場合、引用には常に該当するページを記すが、ページを特定できないとき（本文を要約して引用する場合や文意を説明的に引用する場合など）はこの限りではない。

※同一書籍の異なる頁を複数個所で引用する場合には、本文末の文献リストにおいては単一の文献として頁数を記載せず、それぞれの引用箇所において頁数を記載する。

【例】高橋（2010，pp.23-45）によると・・・である。また、・・・であるケースも存在することが明らかにされている（高橋，2010，pp.150-156）。

※翻訳書を引用した場合には、原著出版年／翻訳書発行年を表記する。

【例】Smith & Johnson（2005／2008）によると・・・

・研究論文のなかで自己の主張に関連付けて他の著作者の文章や図表の一部をそのまま利用する場合、必ずその出典を明記する。

・引用文献も参考文献も一括して、筆頭著者名のアルファベット順に配列し、論文の最後に記載する。

※著者名の姓と名の間はスペースを入れない。

※インターネット等で公開されている資料は、最後に記載する。

・文献は出典ごとに通常の開始位置から書き出し、次の行からは全角１字下げて記載する。

・同一著者による文献が並ぶ場合は年代順とし、同一著者による同年発表の文献が並ぶ場合は、1980a、1980b･･･とする。

・著者が団体や機関である場合、原則として略称ではなく公式名称を用いる。

【例】厚労省→厚生労働省　日赤→日本赤十字

＜雑誌掲載論文＞

著者名全員（西暦発行年）．表題―副題―　雑誌名，巻数（号数），開始頁-終了頁．

※雑誌名は省略しない。雑誌の出版社名や発行団体名は記載しなくてよい。

※ページ数は必ず記載する。

【例】

看護太郎，中看花子，保健学（2020）.日本の看護教育の歴史．日本看護教育学会誌, 2 (1) ,32-38.

Kango, T., Chukan, H., & H, M.　(2020) . History of nursing education in Japan. *Journal of Japan Academy of Nursing Education*, 5, 132-138.

＜書籍＞

著者名（西暦発行年）．書籍名　副題．引用箇所の開始頁-終了頁，出版地：出版社名．

※編集本（著者にあたる部分が編者）の場合は、編者のフルネームの後に（編）と記載する。

※改訂がある場合、引用した版の第１刷の年を発行年とし、書名の最後に（第○版）と記載する。

※出版社名は省略しないように記載するが、「株式会社」や法人名はなくてよい。

【例】

教育太郎（2003）.看護基礎教育入門．23-25，大阪：看護教育出版.

Kyoiku, T. (2003) .*Introduction to Nursing Basic Education.* 23-52, Osaka: Nursing Education Press

＜編集図書の一部を利用した場合＞

章の著者名（西暦発行年）．章のタイトル．編著者名．書名（引用開始頁–終了頁）．出版地：出版社．

【例】

北川公子・桑田美代子・高岡哲子他（2018）．生活・療養の場における看護．北川公子（編）．系統看護学講座専門分野Ⅱ老年看護学（p360－385）．医学書院．

＜翻訳書＞

著者名（著）訳者名（訳）（西暦発行年）．書名．出版地：出版社．

【例】

ペプロウ H. E.（著）稲田八重子・小林冨美栄・武山満智子他（訳）（1973）．ペプロウ人間関係の看護論．東京：医学書院．

＜電子書籍の場合＞

著者名（西暦発行年）．書籍名　副題．引用箇所の開始頁–終了頁，出版地：出版社名．【電子版】

＜オンライン上（インターネット等）で公開されている資料＞

Web サイトまたは Web ページの場合

公開している機関もしくは個人名　URL　（閲覧した西暦年月日）

著者名（投稿・掲載の年月日）．Web ページの題名．Web サイトの名称．http://www.xxxxxxx（閲覧した西暦年月日）

5．要旨書式

・A４版白色無地の用紙を使用し、縦置き横書き、余白は上下 15mm 左右 20mm 程度とする。

・論文タイトルを中央揃え（文字サイズ 12）で記載し、そのすぐ下段に全員の学籍番号、学生氏名（2 段に分けて）、その下にキーワード（文字サイズ 10）を中央揃えで入れる。

・その 1 行下から 2 段組み（25 字×45 行）に設定し、要旨の内容を開始する（MS 明朝、文字サイズ 10.5、左揃え）。

・要旨には論文の最も重要な点を盛り込み、かつ簡潔に書く。それだけを読んで主題から、論文の独創的な点、得られた重要な結果とその意義が分かるようにする。

・書き方の順は【はじめに】【Ⅰ．研究目的】【Ⅱ．研究方法】【Ⅲ．結果】【Ⅳ．考察】【Ⅴ．結論】の順にまとめ、最後【本研究の限界と課題】、＜引用・参考文献＞を記載する。

6．提出方法

・研究指導を受けた担当教員に提出許可を得たものは、表紙の研究担当教員名に捺印をもらう。

・表紙、（要旨）、本文、引用文献および参考文献一覧、資料の順に綴じ、左上一か所をホッチキス止めしたものを、指定期日までに 2 部作成して事務所提出する。

・提出された原稿は学校側で製本して保管するため、返却しない。

30mm

25mm

文字サイズ20

文字サイズ18

7行

看護研究Ⅱ

新人看護師が求める先輩看護師の関わり

－サブタイトルがある場合－

文字サイズ12

研究期間　令和○年○月～令和□年２月

研究の種類　量的記述的研究

（専）京都中央看護保健大学校

看護学科／看護保健学科

学籍番号□学生氏名　3○○1　看護　太郎　印

3○○2　中看　花子　印

3○○3　保健　学　印

3○○4　京都　研子　印

研究指導教員　山△　○子　印

１１行

７行程度のスペース

30mm

文字サイズ12

文字サイズ11

新人看護師が求める先輩看護師の関わり
～（サブタイトルがある場合）～

(学科名)○○学科　3○○1　看護　太郎　3○○2　中看花子
3○○3　保健　学　3○○4　京都　研子

文字サイズ１１

キーワード：新人看護師　先輩看護師　職場環境　早期離職　看護継続教育

文字サイズ 10.5

25mm

はじめに

近年、医療の高度化・複雑化に伴い、安全・安心を確保した医療に対する国民のニーズは高まっている。それに伴い、看護職者は高度な専門職としての能力が求められており、社会的責任は重くなっている。中村・村田・高橋（2006）によると「新人看護師は、同僚や上司からの（…中略…）自己評価が低いことが報告されている（pp.41-50）。このように、（…中略…）である」ことが指摘されていることから、先輩看護師に求めることがわかれば、それに対する支援を講じることができると考えた。

そこで、本研究の目的は新人看護師が求める先輩看護師の関わりを明らかにすることである。

１行空ける

用語の定義

新人看護師とは、看護基礎教育修了後初めて病院に就職した１年未満の看護師とする。

Ⅰ．研究方法

１．対象者

Ｋ市にある２つの地域医療支援病院（病床数 300 床と 500 床）に勤務する看護師 435 名

２．調査方法

１）調査期間：20XX 年５～６月

２）方法：無記名自己記入式質問紙調査

３）データ収集：対象施設の看護部長経由で文書により研究趣旨を説明し、配布した。回答は添付した封筒に入れ、厳封の上郵送法で回収した。

３．調査項目

１）対象者の属性

２）職場の特性と仕事の相談相手　…など　　４段階で回答を求めた。

４．分析方法

選択回答は単純集計を行い、記述統計量を算出した。自由記述は、各質問の記述内容の意味に対し代表する文言を付与し、コード化した。分析の精度を高めるため、（…中略…）研究者間で十分に論議し、信頼性・妥当性を保つよう努めた。

倫理的配慮

本研究は 20XX 年４月、Ａ校の倫理審査委員会の承認（承認番号 2XN00X）を得てから実施した。対象者には、（…中略…）

以上のことから、新人看護師への支援において（…中略…）が必要ではないかと考える。

Ⅴ．結論

新人看護師と先輩看護師との関わりについて質問紙調査を行った結果、以下のことが明らかとなった。

1．先輩看護師は、新人看護師にとって職業人としてのモデルとなっていた。

2.新人看護師の考えを尊重し、質問しやすい態度をとることを心がけていた。

以上から、新人看護師への支援において（…中略…）を活用する必要性があることが示唆された。

研究の限界と今後の課題（おわりに）

本研究では、２施設の看護師を対象にしたものであり、結果を一般化するには限界がある。また、先輩看護師には自身の過去の経験を問うものもあり思い出しバイアスの存在が否定できない。今後、新人看護師のリアリティショックとの関連について、さらなる検証が課題であると考える。

謝辞

謝辞はその対象に謝辞掲載の承諾を得て記載すること

本研究に際しまして、本調査にご協力くださった看護師の皆様に心から感謝いたします。

引用・参考文献

２行目にかかる場合は１文字下げる

Abraham. H. Maslow（著）小口忠彦（訳）(1987)．人間性の心理学　改訂新版　産業能□率大学出版局.

厚生労働省「新人看護職員研修に関する検討会報告書ガイドライン（2011．2.14)」, http://www.xxxxxxxxxxxx　（20xx.xx.xx 閲覧）

香月毅史（2006)．新人看護師が抱える不安とプリセプターシップの必要性を改めて考える　看護人材教育　３（５)，pp.4-7.

中村令子・村田千代・高橋幸子（2006)．新卒看護師の職場適応に向けた支援に関する研究 - 職務ストレスの職位別傾向に関する実態調査 - ．弘前学院大学看護紀要，１，pp.41-50.

パトリシア・ベナー（著）井部俊子（訳）(2005)．ベナー看護論（新装版)．東京：医学書院.

Virginia A Henderson（著）湯槇ます・小玉香津子（訳）(2006)．看護の基本となるもの新装□□版　日本看護協会出版会.

文献掲載は筆頭著者名をアルファベット順にする

頁（ページ）は下中央に入れる

15mm

文字サイズ12

20mm

看護学生の口腔ケアの必要性に関する意識の変化

―口腔ケアの学習会を行った前後の比較―

看護保健学科　学籍番号　学生氏名

文字サイズ10

キーワード：口腔ケア　意識　看護学生

25字

はじめに

日本人の死因の第３位は肺炎で、高齢者の死亡原因として高い状況が続いている。「継続的に口腔ケアを行うことにより、口腔内の状況に関わらず老人性肺炎（誤嚥性肺炎）を防ぐことができる」（米山　2001）と言われるように、肺炎の予防のためにも口腔ケアの重要度は高くなっている。口腔ケアとは、口腔内に付着した汚れや分泌物などを除去する援助のことである。しかし看護師が口腔ケアの必要性を理解していながら、繁雑な日常業務の中で実際には口腔ケアに多くの時間を費やせない実情があること（伊多波　2006）が明らかにされている。

そこで、早期から口腔ケアの必要性について学習を行うことで、その意識を高めることができるのではないかと考えた。

Ⅰ．研究目的

強調体

本研究は、口腔ケアの必要性に関する学習会を行うことによって、看護学生の口腔ケアに関する意識が変化すると仮説を立て、その学習前後における意識の変化を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

１．研究期間

研究期間は○年○月～年○月とした。調査及び学習会の実施日を○年○月○日とした。

２．研究対象

A看護学校に通う看護学生○年次○人とした。

３．指導計画

学習会を行うにあたって指導案と配布資料を作成した。質問紙の内容は「口腔ケアに対する看護師の意識を中心に質問項目を作成した。A看護学校の講義室を利用して、質問紙調査と学習会を実施した。

４．データ収集と分析方法

質問項目 1～6 に対し、4 段階評価で回答を求め、データを Excel に入力した。質問 6 項目について基本統計量を算出し、Willcoxon の符号付順位和検定を実施した。

倫理的配慮

研究協力予定者に対し、研究目的と方法について文書・口頭で説明し同意を得た。また、本研究は本校の倫理審査委員会にて承認を得て実施した。

Ⅲ結果

回収率は 100％であった。項目 1、2 は学習会の実施前後の比較では有意な差はみられなかった。（表１参照）しかし項目 3～6 に関しては 1％水準で有意に差がみられた。また誤嚥性肺炎と口腔ケアの関連性についても学習会の前と後で有意な差がみられた。また実習のイメージに関しても同様の結果が得られた。（表１参照）

表１学習会前後の口腔ケアに対する意識の変化

	質問項目	平均値		標準偏差		有意差
		学習会前	学習会後	学習会前	学習会後	
意識	1. 学習に対して意欲的である	3.16	3.37	0.69	0.5	P＞0.05
	2. 看護技術として口腔ケアに興味関心がある	3.37	3.47	0.73	0.51	P＞0.10
	3. 口腔ケアの必要性が理解できている	2.63	3.74	0.96	0.45	P<0.01 **
	4. 自分の実習（実践）では口腔ケアをしっかり行いたいと思っている	3.39	3.95	0.61	0.23	P<0.01**
知識	5. 誤嚥性肺炎と口腔ケアの関連性が理解できている	1.74	3.63	1.05	0.5	P<0.01**
イメージ化	6. 実習のイメージがついている	1.84	2.95	0.77	0.71	P<0.01 **

Ⅳ．考察

１．学習意欲・口腔ケアの興味関心について

学習会前から平均値は高かった。本研究の参加者を募る際に、口腔ケアの必要性に関する学習会を行うことを伝えた。研究への参加は自由意志であることから、今回の参加者は、口腔ケアに関する興味関心がもともと高かったと考える。看護学生の入学・職業選択動機として、内発的動機は経済面・自立に次いで高いため、はじめから学習意欲や興味関心が高かったのではないかと考える。

２．学習会の効果（資料作成と内容）

今回の学習会では、口腔ケアの目的や誤嚥性肺炎について取り入れた。学習内容として疾患の説明を加えることによって、疾患と口腔ケアを関連付けて考えることができたのではないかと考える。

また学習会にあたっては、対象が低学年次であることから、学習進度を考慮して、配布資料の作成・指導を行った。対象に合わせた学習内容は、口腔ケアに関する知識（誤嚥性肺炎の理解）を深める上でも有効であったと考える。

45行

Ⅴ．結論

１．口腔ケアに対する学習意欲・興味関心は学習会を行う前から高く、学習会前後で変化はなかった。

２．疾患と関連付けることで、学生の口腔ケアに関する理解は深まった。

本研究の限界と課題

本研究はA看護学校の学生の一部を対象として行っているため、一般化することは困難である。今後はその継続性を追跡し見ていくことが課題になると考える。

＜引用・参考文献＞

伊多波怜子・奥井沙織・合原愛・他(2006). 看護師による入院患者への口腔ケアの取り組み、歯科学報、106(4).

米山武義(2001). 誤嚥性肺炎予防における口腔ケアの効果、日本老年医学雑誌、38.